問１

文章Ａは食の意義として、「食べる喜び」を重視している。「食べる」ことの前提には、「つくる」、「知る」、「覚える」、「身につける」という生活の術と、食を通した支え合いの関係がある。そのため「食べる喜び」には「つくる喜び」、「知る喜び」、「覚える喜び」、「料理を身につける喜び」、「分かち合いの喜び」がともなっているとしている。文章Ｂは食の意義として、「心を育む教育」の「すばらしい教材」であることを重視している。子どもたちは料理をすることで、「ていねいな所作」、「もったいない」、「人を気遣う」、「協調する」ということを自然と身につけるとしている。また、魚を捌く体験は、命をいただいて自分は生かされているということを子どもたちに教えることができるとしている。文章Ｃは食の意義として、「生きた教材」であることを重視している。学校給食を通して、食材、生産者、給食そのものを教材に使うことで、各教科での授業を実のあるものにできるとしている。また、「食とは、ほかの生命をいただく行為である」ということや地域の文化、生活、社会について学び、生産者と交流することによって、子どもたちが給食を残さず食べるという意識を持つようになるとしている。(513 字)

問２

文章Ａでは魚食普及活動は「魚離れ」を防ぐための活動であるが、その本質は参加者に「食べる喜び」とそれにともなう「喜び」を再発見してもらうことにあるとしている。そのためには「食べる」までのプロセスを体験することが重要であると考える。なぜなら、文章Ａの「鮮魚の壁」を乗り越えるには「魚のおいしさの喜び」を知ることが重要であるが、その壁を乗り越えるプロセスを魚食普及活動で体験することで「つくる喜び」、「知る喜び」、「覚える喜び」、「料理を身に着ける喜び」、「分かち合いの喜び」を実感したり共有したりすることができるからである。また、文章Ｂ、Ｃでは食を教材としているが、魚食普及活動においても魚を捌き食べ、食材について学び、生産者と交流するといった「食べる」までのプロセスを体験することで「命をいただくこと」と「食を通した支え合いの関係」を実感できるようにすることが重要であると考える。以上のように、魚食普及活動においては、食べる機会を増やすだけではなく、「食べる」までのプロセスを体験することを「喜び」や「豊かさ」の実感に結びつけるといった視点が重要であると考える。(480 字)